同窓会ラッシュのインドネシア

今年三月と九月にインドネシアに行った。首都ジャカルタでも西ジャワのバンドゥン市でも、やたらと同窓会の話題が出た。むかし私が日本語を教えていた北スマトラ大学日本語学科でも、学科設立以来はじめて、大規模な同窓会があったそうだ。

ある夜訪れたバンドゥン市郊外のフードコートでは、五～六〇人の男女がパーティを開いているのが見えた。代る代る舞台に立ち、歌う人あり、演説する人ありとにぎやかだ。高校の同窓会なのだろう、若かりしころの写真がステージ脇のスクリーンに映し出されていた。

ここに連れて行ってくれた知人のレナさんは、翌日には大学時代の演劇サークルの同窓会に参加した。今や三十代となった当時の仲間が旧交を温めただけでなく、現役の若い部員まで集まって、新しい絆を育んだという。

●フェースブック使ってる?

このにわかな同窓会ブームは、フェースブック（以下FBと略す）の普及と深く結びついている。FBは、アメリカ発のSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）である。SNSと言えば、日本ではミクシィが有名だが、メンバーから招待された人だけが登録できるインターネットの会員制サービスだ。おもに実名で会員登録し、写真や近況を公開したり、友達同士でコメントしあったり、さまざまなことができる。

インターネットへのアクセスすらない村落部や貧困層の人びとには縁のない話だが、都市部の中間層や富裕層のあいだでは、ここ一年ほどのあいだにFBが大ブレイクした。昨年の夏にはそれほどでもなかったが、この三月には、都市部で三十代以下の知人に会うと必ずといってよいほど、「FBを使っているか」と聞かれた。九月末現在で、インドネシアの会員数は世界の第七位で、九六〇万人を超えているらしい。

私も試しに入会してみた。するとさっそく北スマトラ時代の教え子たちから友達リクエストが届く。友達登録をすると、さらに共通の友達をもつ人をFBが紹介してくれる。同級生検索というサービスもある。これが、広いインドネシアのあちこちに遠く離れ、疎遠になった同窓生たちを結びつけているというわけだ。

●フェースブックはハラームか

カフェやフードコートで、ノートパソコンや携帯端末にかじりつく姿は、今や都市部では珍しいものではない。オバマ米大統領ご愛用のスマートフォン（携帯端末）「ブラックベリー」も、富裕層の人気アイテムだ。時を忘れて毎日FBにふけり、仕事や学業をおろそかにする人びとも出てきた。

あまりの熱狂ぶりに、この五月にはFBをハラーム（イスラム教の教義に照らして許されない物事）としたほうがよいとする議論まで巻き起こったらしい。だが、結局、大勢としては、FBはあくまでコミュニケーションの手段であって、ハラームになるもならぬも使い方しだいというところに落ち着いたようだ。

この熱はいったいいつまで続くのだろう。かつて私が住み込み調査をしていた村には、いまだ固定電話網もないが、携帯電話は普及しつつある。携帯端末を手に入れた村の旧友からFBで友達リクエストが届く日が、近い将来くるのかもしれない。

スマトラ時代の教え子がジャカルタでミニ同窓会をおこなった

阿良田 麻里子（あらた まりこ）
民博 外来研究員

専門は食文化研究、インドネシア地域研究、言語人類学。著書『世界の食文化6 インドネシア』（農文協、二〇〇六年）では、多民族国家インドネシアの多様な食文化を描いた。現在はインドネシア都市部における職業女性のライフスタイルの変化を研究中。